



今から約1300年前に書かれた『肥前国風土記』や奈良時代の歌集『万葉集』。これらの書物には今も残る地名の由来や、古代の人々の姿が書かれています。古代と今の佐賀を結ぶ時間旅行ができそうです。



武雄の大楠
武雄神社の御神木となっています。樹齢3000年以上と言われ、樹高30m、幹周り20mの巨木です。

調べてみよう

県内の地名には、どんな由来があるのだろうか？



「栄の郡」「賢女の郡」から生まれた「佐賀」

私たちのふるさと「佐賀県」の名前は、一体どうやって生まれたのでしょうか。その手がかりとなる記述が『肥前国風土記』の中にあります。「風土記」は、713(和銅6)年に出された元明天皇の命によって、諸国の地名や産物、語り継がれてきた伝承などをまとめた記録集です。各国ごとに作られました。国内で現存するものは、『肥前国風土記』など五つだけです。『肥前国風土記』には、「佐賀」の名にまつわる次の二つの逸話が登場します。

その昔、肥前国で巨大な楠の栄える様子を見た日本武尊(景行天皇の皇子)が、「この国は『栄の国』と言うがよい」と言ったことから「**栄の郡**」、そして「**佐嘉の郡**」となった逸話があります。もう一つは、佐嘉川(現在の嘉瀬川)の上流に荒々しい神がいたことによる逸話です。その神は往来する人々を苦しめていたため、この地域を治めていた大荒田という人が大山田女・狭山田女の二人の女性の言葉に従って祭事を行ったところ、その神は和らぎ、人々が安全に往来することができるようになったのです。この二人の女性は「**賢女**(賢い女性)」だということから、「**佐嘉の郡**」の名が生まれた

とされる説です。

そのほか、『肥前国風土記』には、佐賀県内各地の地名の由来も記されています。

古代の社交の場、「杵島山の歌垣」

武雄市・杵島郡白石町・嬉野市にまたがる山峰は、総称して「**杵島山**」と呼ばれています。『肥前国風土記(逸文※1)』には、次のような、杵島山に集う古代の人々の姿が描かれています。

※1 かつて存在していた文章が失われて、現在は一部のみ伝わっているもの。

杵島山の周辺の若い男女が、毎年春と秋の2回、酒を持ち琴を抱いて山へ登り、酒を飲み歌い踊っていました。そのときに歌われている一つに「あられふる杵島が岳を峻しみと草採りかねて妹が手を取る(杵島岳があまりにも険しいので、草をつかみながら登ろうとしていたが手が滑ってしまい、思わず恋しい人の手をつかんでしまった)」の歌があり、これは杵島曲と呼ばれています。このような風習を「**歌垣**」といい、

『肥前国風土記』に記載された地名の由来をいくつかご紹介します。

とす さと 鳥櫛の郷	鳥栖市一帯
朝廷に貢ぐ鳥のための鳥屋(鳥を飼う小屋)に由来する	

ふじつ こおり 藤津の郡	藤津郡
日本武尊が海岸(津)に船をお停めになり、翌朝、ご覧になったら船の綱を藤の蔓につないでいたことから	

みね さと 三根の郷	旧三根町
景行天皇が巡行した時に村の宿で「実に安らかに眠れた」とおっしゃって「御寐安の村」と名付けられたことから	

きしま こおり 杵島の郡	武雄市一帯
景行天皇が乗った船が磐田杵の村に錨を降ろしたところ、船を繋いだカシ(杭)の穴から冷たい水が湧き出し、そこが島となり「カシ島」と呼んだことから	

おき こおり 小城の郡	小城市一帯
堡(土石を盛った砦)を築いて天皇に抵抗した土蜘蛛を日本武尊が討ち滅ぼしたことから	

たら さと 託羅の郷	多良町一帯
景行天皇が「この地は食物が豊かなので『豊足の村』と名付ける」と言われ、それがなまったことから	



歌垣公園・肥前犬山城展望所

(白石町産業創生課提供)

歌垣公園は杵島山の中腹にあり、有明海まで一望に見渡せる景勝地でもあります。

古代の人々が歌に託して自分の思いを伝え、結婚相手を見つける場でした。

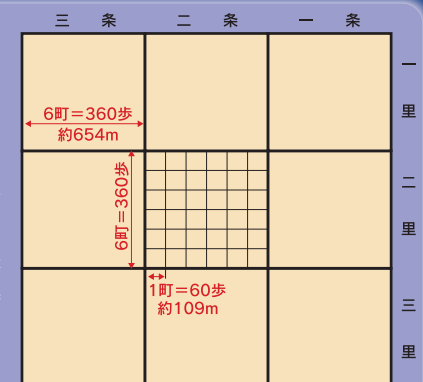
歌垣が行われたことが分かっているのは、この杵島山の歌垣を含め、全国で3か所だけです。そのため杵島山の歌垣は、現在の茨城県つくば市の筑波山・大阪府能勢町の歌垣山とあわせて「**日本三大歌垣**」と呼ば

COLUMN

今に伝わる古代からの呼称「ケ里」

現在の神崎市や吉野ケ里町には枝ケ里、田道ケ里、駅ケ里、吉野ケ里など「ケ里」が付く地名が残されています。これは、古代に行われた土地を区画整理し管理するための制度「条里制」の名残だといわれます。条里制では、区画の長さの単位を1町、6町を1里1条としてそれが畷盤の目のように並ぶものとして土地を管理しました。

※座標法の違いにより、条と里が逆になることもあります。



COLUMN

「領巾振山」と呼ばれる
唐津の鏡山

せんかてんのう おおとゆき てひこ
宣化天皇2(537)年、大伴狭手彦(大伴佐提比古)が朝鮮半島出兵時に立ち寄った唐津の地で出会ったのが現在のきやうぎまち厳木町出身の松浦佐用姫まつうらさよひめでした。二人は恋に落ちますが、やがて大伴狭手彦は朝鮮半島へと出陣します。

松浦佐用姫は大伴狭手彦の船が見える鏡山に登り、身にまとっていた領巾(肩にかけて左右にたらしめた布)を懸命に振ったとされます。その時から鏡山は別名「領巾振山」と呼ばれるようになりました。

万葉歌人山上憶良はこの伝説をもとに「遠つ人松浦佐用姫夫恋に 領巾振りしより負へる山の名」(松浦佐用姫が夫を恋い慕って、領巾を振った時から名付けられた山の名だ)と詠みました。



松浦佐用姫像

出身地である厳木の道の駅には、松浦佐用姫の像があります。

れています。

万葉集に詠まれた肥前国松浦郡

『肥前国風土記』がまとめられたのとほぼ同時期の7世紀後半から8世紀後半にかけ、日本最古の歌集『万葉集』が編さんされました。4500首以上収録されている『万葉集』には、佐賀県内のことを題材にしたものが38首あり、そのうち、現在の唐津市や玄海町にあたる肥前国松浦郡まつうらのこおりに関する歌が、30首残されています。

728(神亀5)年4月に、大宰師(大宰府長官)として筑紫ちくしに赴任した大伴旅人おおとものたびとは、松浦郡の歌11首を『万葉集』に残しています。大宰府の長官が遠い松浦郡まで足



万葉の里公園

(唐津市観光課提供)

写真の歌碑には下記のように詠われています。
「玉島のこの川上に家はあれど
君を恥やしみ躰みさずありき」 大伴旅人
(玉島川の上流に家があるのですが、あなたには恥ずかしくて私の家だ、などと申し上げられません)

を伸ばしたのは、景勝地に遊びに来ただけではなく、国防の最前線さきもりに立っている防人の視察に訪れたためと考えられています。古代から松浦郡は朝鮮半島や中国大陸との接点として、大和朝廷にとって重要な場所だったのです。

学校の取組

【開校記念鏡山登山】

■佐賀県立唐津東高等学校

唐津東高校の開校を記念して、鏡山への登山を通し、郷土の地理・歴史・文化、自然に親しんでいます。



調べて書いてみよう!

県内の地名の由来や松浦佐用姫の伝説が詠われた和歌を調べて書いてみよう。



出かけてみよう!



歌垣公園 (杵島郡白石町大字堤 3782)

240本の桜と7万本のツツジが植えられており、シーズンにはたくさんの花見客で賑わいます。

TEL 0952-84-7121 (白石町役場産業課)

(白石町産業創生課提供)



万葉の里公園 (唐津市浜玉町浜崎 1901-389)

大伴旅人や山上憶良などの歌碑があります。

TEL 0955-72-9250 (唐津市まちづくり課公園管理係)

(唐津市観光課提供)

検索してみよう!

肥前国庁

肥前万葉集

佐賀 風土記

日本三大悲恋伝説

